

映画「スパルタカス」の時代

名作映画「スパルタカス」―実は当時の世相や事情を反映し、日くに塗れた作品であった。本稿では数多いそのエピソードをまとめてご紹介する。

映画「スパルタカス」概要

- ・ Howard Fast の原作に基づく **1960 年公開** のハリウッド映画 (ユニバーサル・ピクチャーズ)
- ・ 製作費 12 百万ドル、全世界興行収入 60 百万ドル※ (内米国 30 百万ドル)
※前年公開の「ベン・ハー」の全世界興行収入は 74 百万ドル
- ・ 製作総指揮/主演 **カーク・ダグラス** (「ファイナル・カウントダウン」「突撃」)
監督 **スタンリー・キューブリック** (「時計仕掛のオレンジ」「2001 年宇宙の旅」)
脚本 **ダルトン・トランボ** (「ローマの休日」「栄光への脱出」)
出演 **ローレンス・オリヴィエ** (「嵐が丘」「レベッカ」「ハムレット」)
チャールズ・ロートン (「ヘンリー八世の私生活」「情婦」)
ピーター・ユスチノフ (「クォ・ヴァディス」「トプカピ」)
ジーン・シモンズ (「ハムレット」「野郎どもと女たち」)
- 受賞 **1960 年アカデミー賞 6 部門ノミネート、助演男優賞他 4 部門受賞**

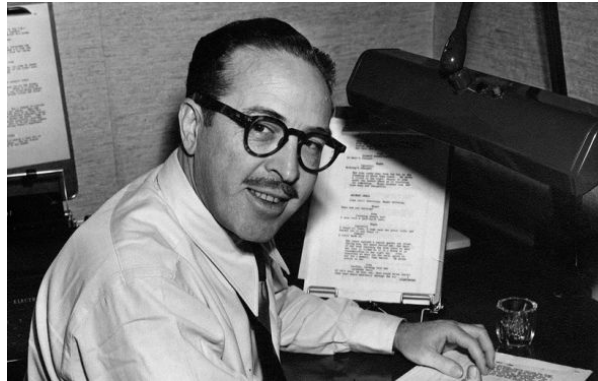


何と企画丸被り…！初手の初手からトラブル含み…！

- ・ **カーク・ダグラス** がこの「スパルタカス」映画化の企画をスタートさせた時点で、実は既に **ユル・ブリナー** 主演で他社が映画化を進行させていた！
- ・ 内容も被っていて、**カーク・ダグラス** も本音では「あのスキンヘッドはスパルタカスのイメージに合う」と思ったが、後発にもかかわらず「スパルタカス」制作を強行した。
結果として競合社の方はボツになったから良かったが…。

脚本はあのブラックリスト男…！

- ・原作者ハワード・ファストが脚本も担当する構想だったが、ファストは遅筆の上、その脚本は原作にはあったドラマチックな魅力を欠いていたため、カーク・ダグラスは彼を解任し新たな脚本家を迎えた。契約書のサインはサム・ジャクソンー この偽名の持ち主こそが、**ダルトン・トランボ**である。



- ・トランボは1940年代にアメリカで巻き起こった「赤狩り」に反対したため所謂「ハリウッド・テン」として1947年に投獄され、ハリウッド映画界から追放されていた脚本家である。実はトランボはブラック・リストに載っている間も借名/偽名で原作や脚本を書きまくり、アカデミー原案賞を2度受賞している。それが「黒い牡牛」(ロバート・リッチ名義・1956年)と、あの「ローマの休日」(アラン・マクラレン・ハンター借名・1953年)なのである。「スパルタカス」の脚本執筆時も、もちろんトランボはハリウッドから追放されている状態だった。
- ・このような状況下であったため、クレジットする脚本家の名義をどうするかということとは揉めに揉めた。最後は製作総指揮のカーク・ダグラスが決めることになったが、彼はトランボを重用しながらクレジットには偽名/借名を載せるこれまでの映画製作者たちの欺瞞を強く感じ、遂に「**ダルトン・トランボ**」の名をそのまま載せることを決断する。かくして「スパルタカス」はダルトン・トランボの復帰第一作となった。

※尚、2015年にはトランボの毀誉褒貶激しい脚本家人生を描いた映画である「トランボ ハリウッドに最も嫌われた男」が製作され、2016年夏に日本でも公開されたところである。

18日で監督更迭…！ギャラは全額支払い…！

- ・「スパルタカス」はアンソニー・マン(数々の西部劇や「グレン・ミラー物語」で高名)を監督に迎えデス・ヴァレーにてクランクインしたが、映画の冒頭部分であるこのリビアの石切場のシーンを撮り終え、剣闘士養成所へと舞台を移して間もなく、カーク・ダグラスは監督を更迭してしまう。
- ・マン監督が既に映画をコントロールできなくなっており、殊にピーター・ユスチノフのほぼ言いなりになっていると判断したカーク・ダグラスは、**撮影開始から18日目に、監督としてのギャラ75,000ドル※全額を支払い、マンを監督から降ろしたのである。**



- ・完成版「スパルタカス」でも冒頭の石切場のシーンはマン監督の演出がそのまま使用されている。

※全米都市部 全産品消費者物価指数を参照すると 2008 年

時点で 1959 年の 7.4 倍に達している

→ これに基けば 75,000 ドルは現在の 555 千ドル（日本
円で数千万円規模）にあたる

後任監督は 30 才（若い） …！大作の監督は初…！

- ・カーク・ダグラスがマン監督の後任として連れてきたのは…当時弱冠 30 才のスタンリー・キューブリックだった！カーク・ダグラスは同じく製作総指揮/主演の「突撃」で監督を務めたキューブリックの手腕を知っていたのである。



- ・キューブリックが監督を受諾するかどうかを決断すること、及びそのための準備期間は **24 時間**しか与えられなかったという。更にキューブリックはその週末に現場に入り、脚本を読み、打合せを傍聴して直ぐの月曜日には最初のシーンを撮影できる態勢になっていたというから驚異的だ。さすがは後に巨匠/天才と称されたキューブリックといったところか。
- ・但しキューブリックが後に『スパルタカス』だけが、僕が完全に統制できなかった映画だ。」と語り、永く「スパルタカス」を自分の監督作品とは認めない、というスタンスをとっていたことは有名。キューブリックとカーク・ダグラスとは「スパルタカス」を以って完全に縁切りとなり、カーク・ダグラスは自伝の中でキューブリックのことをこう語っている。

「素晴らしい才能と、性格の良さは関係ない。クソッタレが素晴らしい才能を持つこともあれば、その反対に、本当にイイ奴で微塵の才能もない者もいる。スタンリー・キューブリックは、**才能のあるクソッタレだ。**」※

※音楽も同じだ、と思う（というより絵画ほか芸術・芸事全般に云えると思う）

今度はヒロイン…！ 2日で交代…！

・ヒロイン候補にはイングリッド・バーグマンやジャンヌ・モローなどが候補に上がったが、紆余曲折を経てザビーネ・ベトマンというドイツ人女優に決まった。無数の映画を見てカーク・ダグラスが探し出した、映画に映える素晴らしい美貌の持ち主である。しかし演技力がないと判ったため、カーク・ダグラスはドイツ語訛りの英語を矯正する台詞のコーチと、(ブラックリスト入りのため演技指導で身を立っていた) ジェフ・コーリーの演技指導をつけて、ベトマンの演技力を磨こうとした。



- ・しかしそれらの成果はベトマンに現れず、感情表現の乏しさが目立つ。キューブリックは最後にベトマンから引き出されていない感情の源があるのかどうか試してみることにした。ヒロイン降板を伝えてその反応を見ることにしたのである。果たしてベトマンは熱望していた役から降ろされることを知り、悲しみで無言のまま立ち尽くした。
- ・ベトマンは彼女の撮影開始から2日目、35,000ドル※の報酬を受取り去って行った。後任は(クイーンズ・イングリッシュを喋ることから一旦は見送られた) ジーン・シモンズだった。

※マン監督の75,000ドルに続き、撮影2日のベトマンも35,000ドルとギャラは全額支払われた。

プライドの高い俳優同士の確執…！

- ・4人の主要俳優(カーク・ダグラス、ローレンス・オリヴィエ、チャールズ・ロートン、ピーター・ユスチノフ)は自分の役を大きく見せるため、互いを好敵手と認めて毎日鎬を削っていた。あらゆる場面で意見が相違し丸くまとめるのは至難の業だった。
- ・そもそもオリヴィエ、ロートン、ユスチノフに出演依頼をした時の脚本は、出演了承を得るためそれぞれ違ったものを送っていた=それぞれの役が“大きく”描かれていたという説もある。(ユスチノフもそう語っている。)
- ・特にオリヴィエとロートンは文字通り「水と油」。台詞の読み合わせの段階から既に何とオリヴィエがロートンに指導し始め、それをロートンが腐し返すという、淡々としながらも脂汗の滲むような緊迫した気まずい場の様子を、ユスチノフが後年インタビューで語っている。また、ヒロインを演じたジーン・シモンズの撮影期間中のインタビューを見ても、オリヴィエやロートンに気を遣っていることが感じ取れた。もう30才で母親にもなっていた彼女が、違和感を与えるほどに娘っぽく振舞って、何かをごまかそう、無難にやり過ごそうというインタビューの様子なのである。

まるで監督が何人もいるような…！

- ・総合プロデューサーであるカーク・ダグラスはもちろん徹底的に拘ってモノを言う。しかしオリヴィエもロートンもユスチノフも自ら監督だってできるやり手であり、また強い拘りと強烈なプライドの塊である。もちろん、陰に日向にあらゆることに口を出し、勝手にセットまでも変更させていた。脚本は制作中に何度も変更を繰り返し、書直しは1,400枚にも及んだという。
- ・ダルトン・ランボもラフ試写の段階で、恐るべきことにほぼ全シーンに亘り細かいコメントを付け率直に歯に衣着せぬ自分の意見を述べている。(何の相談もなく自作の脚本が変更されたり削られたりされていることに激しい怒りを発しながら。)この指摘はカーク・ダグラスも評価しており、例えば奴隷軍の日常生活のシーンは全てこのランボの指摘に基き追加撮影されたもの。
- ・ランボは「自由のために戦う」というテーマへの共感と執着が異常なほどだったし、またこの收拾のつかない状況なのに、「キリキア海賊の交渉人役がショボ過ぎる。この役にはオーソン・ウェルズを招聘すべき！」と要求する始末。更にこれ以上ウルサイ大俳優を集めて、一体どうするというのか！

完璧主義者 キューブリック…！

- ・キューブリックが連れて来られた時、誰もがカーク・ダグラスに抱き込まれていると考えたが、キューブリックの因習打破的な映画制作を見ると、すぐにその誤解を解いた。キューブリックはまさに怖いものなし、「どんな話でも聞くが、最後は自分の思い通りにする。」と表明していた。カーク・ダグラスはキューブリックとの友情を深めようと努力したが、キューブリックは相変わらず周りとは打ち解けず、完璧主義を通した。
- ・戦闘シーンの後は、奴隷の死体が戦場一帯を埋め尽くす場面となるが、これはスタジオの屋外セットで撮る予定で用意されていた。



ところがキューブリックはスタジオ内で撮影すると言い出した。外の風景を屋内に作るため3つのスタジオが使われ、美術スタッフが丘陵などを含めた壮大な風景を作り、数百人のエキストラが配置して、死体でいっぱいになった場面を作り出すのだ。

ところが撮影日当日、美術スタッフが作り上げた丘に何百人という奴隷の死体が横たわるスタジオを見たキューブリックはカメラが回り始める前に言い放った。

「これでは嫌だ。外で撮りたい。」

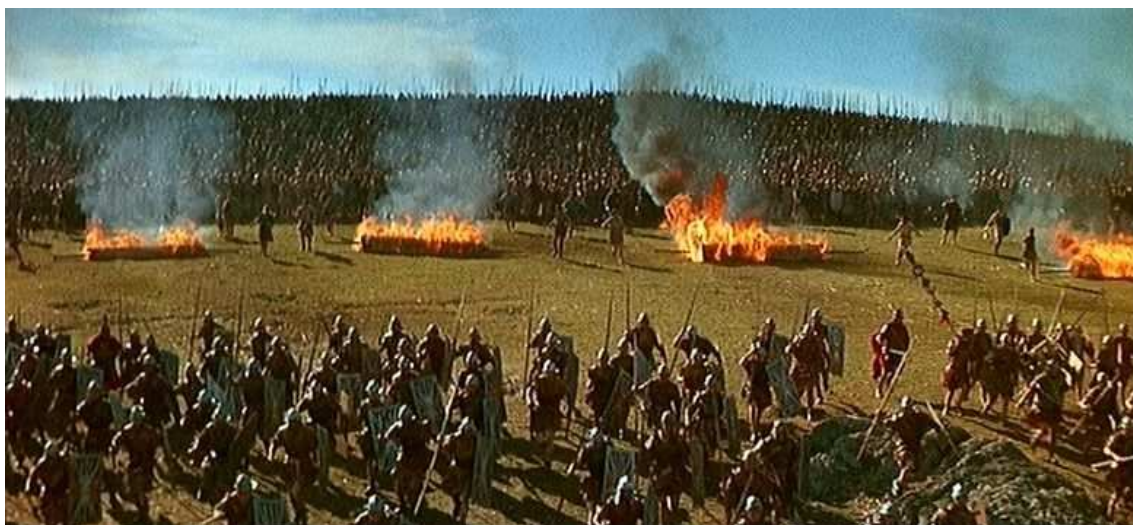
かくしてそのシーンは元々の予定通り、外のセットで撮影された。

(建設と労力と努力のロス、ユニバーサル映画が持つこととなった。)

- ・ダルトン・トランボは「キューブリックは気に入らないことがあると撮影現場でわざと何らかの“事故”を起こす。そして緊急事態を装い脚本家の承認も得ずに変更を試みたフシがある。しかもその変更は間違っているケースが多い。」と批判、対立していた。キューブリックは撮影監督からも嫌われていたが、キューブリックはこうしたスタッフの敵意に影響されなかった。「少しも」気に留めることはなかったという。
- ・それでもキューブリックは類稀といって良い厄介な主演俳優たちの確執や暗躍をもやり過ごし、映画を完成させた。それはきっとキューブリックが監督だったからこそとも云えるだろう。

戦闘シーンに本物の軍隊を雇う…！

- ・キューブリックは奴隷軍とローマ軍の決戦シーンの冒頭に、訓練された重装歩兵の行進が必要と考え、**本物の軍隊を雇うことを発案**した。ところがアメリカ陸軍は正規の軍服以外の衣装を身に着けることがそもそもNGでダメ、そこでスペインへ飛んで「**本物の**」**スペイン陸軍を雇った**。おそらく今では考えられもしないことだろうが、当時は実現できたのだ。



- ・スペインロケは撮影自体は1週間で完了するも、美術スタッフなどは4ヶ月に亘り逗留していたという。尚、このスペインロケの間にキューブリックとカーク・ダグラスの不仲はもはや修復不能となったと伝わっている。

完成！しかし激しいボイコット運動に遭う…！

- ・最後まで監督に愛されることなく完成したこの映画「スパルタカス」という映画を「カーク（・ダグラス）がプロデューサーだった。全ては彼と脚本家のダルトン・ランボ、そして責任者のエドワード・ルイスの意のままだった。」と総括し、「自分の作品ではない」と結論付けた。
- ・それでもキューブリックの仕事はブレない。編集作業に入ってから編集担当のロバート・ローレンスは「(彼に反発して、彼の指示したところから) 2フレームほど誤魔化して前や後ろで切っていたら、彼にはほとんど見破られた。」とコメントしている。
- ・こうしてさまざまな「曰く」を抱えながら完成した映画「スパルタカス」の出来は決して悪くない。—というか名作の一つに数えられるだろう。

しかしその苦心苦闘の作が叩かれる。

「この映画は、ユニバーサル映画に売られた赤（ファスト）の小説をもとに、赤（ランボ）が書いた脚本で制作されたのだから見てはいけない。」

この伝で「アメリカ在郷軍人会」、ジョン・ウェインを中心とした「アメリカの理想を守る為の映画同盟」などの愛国者団体から激しい攻撃が続き、ボイコット運動が展開されたのである。

- ・この状況を救ったのは当時のジョン・F・ケネディ大統領だった。ケネディはこれまでの大統領慣例を破り、事前通知なしでワシントンDCの一般上映を見に行ったうえ、報道陣に対し「スパルタカス」の好意的な感想を述べたのだった。

一流の才能が恥ずかしげもなくぶつかり合った作品

- ・この作品はそれぞれに豊かな才能がひたすらにぶつかり合ってきた作品である。
- ・まず「そこにある現実そのもの」を表す映像表現者の現実主義（キューブリック、ダグラス）と、脚本/原作の理想主義/概念至上主義（ランボ）との衝突である。ランボの残したコメントは鋭く示唆に富むが、まさに「映像で見せなければならない」「観客を楽しませ感動を与えなければならない」映画制作に鑑みると、やはり突抜け過ぎあるいは玄人好みに傾き過ぎで、頭でっかちな部分もあるように感じられる。
- ・次にスパルタクスの描き方と、この映画のテーマの捉え方の衝突である。
スパルタクスを、原作者ファストは「抑圧に立ち向った革命家」、脚本家ランボは『『個』を完全に超越した超人、神格化されるほどの英雄（クラススでさえ及ばない)」、キ

キューブリック監督は「葛藤を抱えたまま敗れた男」、そしてカーク・ダグラスは「伝説的英雄であり、一方では自由と愛を求めた一人の人間」と捉え方/描き方が制作サイド内で全くバラバラ、の上にそれぞれ「一ねばならない」と強硬に主張し、事あるごとにぶつかり合ったのである。

- ・そして結局、映画「スパルタカス」はどうなったのかー。

完成版を見る限り、やはり最終的に制作総指揮カーク・ダグラスの思いが多くを染めたのかな、という印象である。カーク・ダグラスは『『スパルタクス』は愛の物語。自由への愛、スパルタクスとヴァリニアの愛…』と述べているが、スペクタクル満載でスリリングなシーンをたくさん味合わせながらも、そこに重点をおかれた印象がやはり強いのである。

【出典・参考】

DVD 「スパルタカス スペシャル・エディション」

(2012年/ジェネオン・ユニバーサル)

『ローマの休日』を仕掛けた男―不屈の映画人ダルトン・トランボ』

ピーター・ハンソン 著 松枝 愛 訳 (中央公論新社)

「映画監督スタンリー・キューブリック」

ヴィンセント・ロブロット 著 浜野保樹、櫻井英理子 訳 (晶文社)